転生少女さやか(!?) ☆マギカ　スピンオフ　赤黄緑 inＳＴＳ

ナガン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生少女さやか（！？）　☆マギカ　スピンオフ　赤黄緑　ｉｎ　ＳＴＳ

【Ｎコード】
Ｎ９３６１Ｚ

【作者名】
ナガン

【あらすじ】
これは、厨二病な魔法少女と純粋無垢な魔法少女と食いしん坊な魔法少女のリリカルな話。
誰かやらないかなと期待していたけど誰もやらないから俺が行くぜ！！
これは転生少女（！？）さやか☆マギカのスピンオフ作品です。

設定はさやか魔改造ものである本家を踏まえていますので、いろいろと原作とは矛盾があります。

プロローグ

ワルプルギスの夜が襲来し、その被害の復興が始まっていくばくか経った昼過ぎ。

マミ宅では一つの戦いに終止符が打たれようとしていた。

『スターライト…ブレイカーァァァ！！！』

テレビ内で。

１９歳で魔法少女を騙る（かたる）ある治安維持組織のエースが、敵で身体的には大人とはいえまだ精神的にはまだ５歳の少女に特大の砲撃を行っているそのシーンをガン見しているのは、緑のワンピースを来た、ゆまという少女。

とは言っても、別にそこまで悪逆非道なシーンではないが。演出の問題で派手になっているだけである。

二重砲撃もそうであるはずだ。

「ふふっ、ゆまちゃん。そのアニメ好き？」

奥から、金髪をドリルロールで纏めた、おおよそ中学生とは思えない胸をした少女、マミがリビングにやって来る。
お盆に乗せたケーキはなんとも食欲をそそり、紅茶は景気良く湯気をあげる。

「うん！！」
「そうよね。特に主人公の高町なの「やめんかマミィ！！」」
長くなりそうなマミの語りに横槍を入れた赤髪の少女。名を佐倉杏子と言う。
ポッキーをかじりながらマミにいりきたつ。

「もう」
「もうじゃねえ。てめえまたゆまに吹き込もうとしてたな。つーかゆま。なんでそんなガン見してたんだ？アタシはそんなことしないし出来ないぞ。」
「え？出来ないの？」
「…それはボケだよな？」
「そんなことないわよ。私はただこのアニメの面白さをわかって貰いたくて…ねえちょっと聞いてる？」
現在二人はマミ宅に居候中である。
杏子の最近の悩みはゆまが少し厨二病になり始めていること。

何を隠そう、家主のマミは容姿端麗、学業優秀、であるが、重度の隠れオタクであるのだ！
どうしてこうなったかは後々明かすとして、杏子はその原因が自分

にあるのではと考えている。

「それよりも、ほら、ケーキ焼いたわよ。食べましょう。」
「うん！」
「ぐっ…ああ。」

そういうアレで、杏子はマミがゆまを厨二病へと引きずり込もうとするのを阻止しようと、日々戦々恐々としているが、結局は食べ物に釣られてうやむやになっている。

食い意地が…スゴいのだ。

「杏子、さやかはどうしてる？」
「さやかなら、なんだか魔法少女を元に戻すには大量の魔力がいるとかなんとか言って、ちょっと聖杯盗ってくるっていってたな。。」
「盗むの！？」

ここで、さやかとみきについて簡単に語ろう。

美樹さやか

一言で言えば神様である。
少し前に二代目八十禍津日神（やそまがつひのかみ）となった。
所謂、チートキャラである。

正に俺得。

最近はいろいろと忙しく奔走中である。

時音　みき

さやかの魔女。
使い魔的存在である。
外見は正しく黒い初音ミク。
武器だって万能ネギ。
どうしてこうなったかは…フッ

これも俺得。

「そういえばあなた、巫女にならないか、って頼まれたって聞いたけど？」
「おま、どこでそれを…保留だ保留。アタシにゃちと荷が重い。」
「そうなの？巫女服似合うと思うんだけど…」
「やっぱそこか。」

ちなみにこの二人の活躍（比重は偏っているがな）が見たければ、本家の方を

「露骨な催促乙。」
「ちょっと、ダメよ私が言いたかったのに。」
「それもそっちか！！」

――――――――――――――――――――――――

この三人は人とは違う所がある。
彼女達は”魔法少女”なのだ。
先程のアニメでは呼称として使われていたが、こちらでは、種族として使われているのが一番近いだろう。
その一貫として、彼女達はここ、三滝原周辺に出現する”魔女”を駆逐している。

「はっ！！」

マミが放つリボンが魔女を捕らえる。

「杏子！今！」
「はあああ！！」

身動きが取れないところに杏子が槍を構えて肉薄。
そのまま一刀両断した。

それが決め手となり、魔女は消滅する。
そこから出てきたＧＳを杏子が回収する。

「ふう」
「今の魔女。私だけだと危なかったわね。」
「ああ。まさか魔法を無効化してくるなんてね。厄介極まりなかったよ。」

二人はＳＧ（ソウルジェム）を取り出して、浄化を開始する。
ただし、かざすのはＧＳ（グリーフシード）ではなく、一枚の札。

ＳＧから出た穢れは、札へと吸い込まれていく。

「しっかしすげーな。これ」
「確かさやかがＧＳ換算で優に１００個は越えるって言ってたわよね。」

ＳＧは魔法少女の魔力の源。
魔法少女が魔力を使用すると、段々と濁っていく。

対するＧＳは魔女の核のようなものである。
魔女を倒すと手に入れることが出来、ＳＧを浄化するのに使われている。

魔法少女達はＧＳを求めて、しばしば衝突を繰り返していた。
もっとも、この札のおかげでそんなことはめったに無くなったが。

「キョーコ、マミお姉さん。これ…」

と、今まで会話に入って来なかったゆまが光る赤い結晶を手にやっ

て来た。

「なんだそれ？」

「これは…もしかしなくてもレリック！？…のレプリカよね。

…お手柄よ。ゆまちゃん。」

「おい、なにくすねようとしてるんだ。」

「でもマミお姉さん。これ…」

ゆまが何か言いかけた時、レリックが一際大きく輝き出す。

「うわあ！？」

「え！？なにこのベタな展開。」

「ゆまそれ捨てろ！！」

杏子の警告も遅く、もう間に合わない。

「くっそ！！」

三人は悲鳴と共に、この世界から消え去った。

「っ！！杏子達の魔力が…消えた…？」

「ほむらちゃん？」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

某所

「この設定で良いんじゃな？」
「ったりめーだろ！！むしろどんとこい！！」
「はやくはやく。転生させなさいよ～。」
「まあそう急くな。こっちも色々と手順と言うものがあるんじゃ。」
「くぅ～。これでハーレムｋｔｋｒだぜ！！」
「あっ！！ずるい！！私のよ！」
「じゃあお前、誰がハーレムメンバーだ？」
「私はノーヴェかな～。”赤毛”で”勝ち気”な所が…「お前さん達。準備出来たぞ。」よっしゃ！いつでもカモン！」
「では、リリカルなのはの世界に、いってらっしゃい！！」
「「それなんて所さん！？」」

ここにも…いや、なんでもない。

設定集

巴　マミ

１５歳

頼れる先輩、と見せかけてどっぷり心酔すると、いつの間にか厨二病にされてしまうという。

厨二病さまさまである。

色々と豆腐メンタルとか言われているけど、頑張って立ち直った。

武器はマスケット銃。とはいっても大きさは様々だが。

加えて、ボルトアクションのアンチマテリアルライフル。

佐倉　杏子

１４歳？

巴家にゆまと居候している。

四六時中食べていないと落ち着かない性格。

マミの厨二病が最近うざいと感じている。

座右の銘は自業自得。

マミと同じで結構ベテラン。

さやかに巫女になれとせがまれた。

千歳　ゆま

？歳

ロリコンホイホイ。

主に後衛を担う。

過去に虐待されていたという過去を持つ。

現在マミがこちら側に引きずろうと画策しているが、まだそういうのには疎いのが幸いして、染まってはいない。

＊年齢に関しては、色々と矛盾が起こりそうなのだが、少なくとも１０歳以下。

お札

ＧＳの代理品。

これ一枚で１００個のＧＳに匹敵する。

ぶっちゃけ魔法少女はほぼ無限に魔力使い放題。

美樹　さやか

逸般人。チート

安定のフラグを折って生還した。

おぜうさま

マミとの好敵手。

赤い館に住んでるらしいです。

一話目（前書き）

ナガン「マミさんが厨二なのは周知の事実だろ？」

一話目

緊急入電

本日１３２４、★◎地区ニ小規模次元断層観測。

管理局員ハ速ヤカニ現場ニ急行セヨ。

繰リ返ス…

――――――――――――――――

「…どういうことだオイ。」

「私だって聞きたいわよ…」

「うわ～」

路地裏の向こうは別世界だった。

N〓Sでよく見かけるテンプレ的展開で異世界に迷い込んでしまったわやっふい♪

「アタシ達確か廃工場にいたんだよな？間違ってもこんな色々と近未来な世界じゃなかったよな？」

「ええ、そうよ。恐らく原因は…」

「レリック…だよな？」

「ごめんなさい。」

「いや、見ず知らずの一般人の手に渡らずに良かったさ。」

ポンポンと杏子はショボンとするゆまの頭を撫でる。

本当に姉妹と言うより親子よね。

「とりあえず周辺を探索しようぜ。ここが何て言う町かぐらいは確かめないと。」

「別れる？それとも…」

「ん～。見たところ治安も良さそうだし、大通りで真っ昼間からなんかするバカもいないだろ？」

そういうわけで、

杏子、ゆま組と私に別れて探索することとなった。

二人の背中を眺めながら考える。

とりあえず、本屋さんかどこかで地図は入手すべきよね。

後、この地域の通貨も手に入れないと。

治安維持組織がなんなのかも調べないとね。

…

私、一人ぼっち…。

「うまそ～。」
「お、嬢ちゃん買ってくかい？」
「おう！」
「キョーコ、大丈夫なの？」
「大丈夫だ。問題ないさ。」

――

そもそも言語が通じるかどうかということを失念していたけど、何故か通じてしまったわね。

まあ、理由はもうわかっているけれど。

観光センターから取ってきた地図を眺める。

地図の上にはこうローマ字で書かれていた。

ミッドチルダ首都　　クラナガン

科学者の間では、知的生命体は全て私達と同じような足跡を残すって信じられているって聞いたけれど、正しくその通りね。ローマ字だったのは行幸だったわ。

…それにしても、薄々勘づいていたけど、まさか私達が、リリカルなのはの世界にトリップするはめになるなんて…。
異世界なんて、ＳＳの中だけのものだと思っていたのに。

実際は耳を澄ませて、会話を聞けば、時々明らかに言語が違うのが混ざっている。

それでも言語が通じるのは、何らかの対策が講じられているからだろう。

でも、あれは読んで面白がるもので、体験するものではない。
原作介入？私一人なら考えたけど、こんな形だし、何より杏子とゆまちゃんがいる。
私だってそれぐらいの区別はついてますよーだ。

話を戻すけど、新聞を立ち読みさせて貰ったら、見出しに機動六課のことがデカデカと書いてあった。
記事の内容はホテル・アグスタのだった。
写真見たら内容読まなくてもそれぐらいはわかる。

原作の序盤、かあ…。

…これ以上の考察は止めておきましょう。杏子と落ち合った後で良い。

あれから一時間は経つし、一回情報を整理してみるのもいいわね。

『杏子、ちょっといい？』

『どうした？』

『いろいろとわかったことがあるから、情報を整理しようと思って。』

『助かる。ローマ字アタシ読めなくて困ってたんだよ。』

やっぱり一緒に探索すべきだったわね。

『それじゃあ落ち合いましょうか。場所はさっきの別れた…』

そこでふとあの場所を思い返す。

…あそこどこなの？

マミ達が降り立った場所は何のへんてつもない路地裏。

目印となるもの、詰まるところ記憶に残ったものは何一つなかった。

『いや、わりいそこの場所わかんねえ。』

『私もよ。そこから、何か目立つ建物とかないかしら？』

結局、合流するのにはＳＧの反応を使って解決した。

「アニメの世界ぃ？んなわけねけよ。マミ、頭おかしくなったか？」

うん。これが正常な反応なんだろう。絶対そうなのよ。杏子が特別なわけないのよ。

悲しくなんか無いんだから！！

「おかしくなんかなってないわよ。こんな時にふざけるとでも思ってるの？」

「いやまあ…」

いやまあ…って何？

私そう思われてたの？

嘘でしょ？

「真面目に言うけれど、もし仮にアニメの世界だとしたら、私達お尋ね者よ？」「はぁ？ど、どうしてだよ。」

「今ゆまちゃんが持っているレリック。これはアニメではロストロギアと呼ばれていて、時空管理局、この世界の警察だけど、それを主に主人公達が回収していくのよ。」
「？つまりどういうことだ？」
「レリックは覚醒剤、管理局は警察。ＯＫ？」
「お、ＯＫ…」

ようやく杏子も合点がいったようね。
ああ、この何とも言えない充実感…。
やっぱりこれは…フフフ。

それにしても、私はそれで逮捕されたことないから、実際の所わからないけれど、確実に「ちょっと署まで」状態になるわよね。

「そんなわけだから、アニメの世界だと考えて行動する方がいいかもしれないわ。それにそう考えた方が色々としっくりくる。」
「…それで、こっからどうするんだ？」
「そうね…まず、私達がレリックによってこの世界に来たのは確実よ。」

マジカル眼鏡を装着して、集中～。
キュイイイイン
…ゆまちゃんが持っているレリックは今は不自然な程、輝いていな

い。
エネルギーを使いきってしまったのかどうかはわからないけれど、私達にとってはかなり不味い。
何せ、帰る手段が失われたということと同義たから。

「私達の最優先事項は元の世界への帰還よ。取るべき行動は、管理局に保護を求めること。」
「メリットとデメリットは？」
「そうね…ます、メリットとしては、情報を入手しやすい。数多の世界を束ねる組織だから、もしかしたら帰れるかもしれない。望み薄だけれどね。」
「どうしてだ？」
「インキュベーターの存在よ。あいつは他の世界から進出してきたけど、その所業は極悪非道。誰かが管理局にリークしてもおかしくない。それに、さやかのあの攻撃に感付かないのもおかしいし、何よりクリームヒルト・グレートヒェンの存在を感知しないのがおかしいわ。彼女は世界を滅ぼしたのよ？そんな存在を管理局が察知出来ないのは、私達の世界がとんでもない僻地にあるのか…」
「そもそも”世界”が違うってわけか。」
「そういうこと。それでも衣食住は保証されるのは大きいわ。レリックを所持できなくなるけれど。」
「う～？」

ゆまちゃんは話が難しく、唸っている。理解が追い付くはずがないわよね。
大丈夫よ。後で解りやすく話すから。

「そして、私達にとって最大の重要事項。」
「魔法少女か。」

「そう。もしかしたら話さずに過ごせるかもしれないけれど、希望的観測だわ。どこまで話すべきかは決めておかないと、最悪モルモットにされかねない。」
「なあ、そのことなんだけどさ。」

ここで杏子が言い辛そうに口を開く。

「アタシ達のこと、アニメになってるんだよ。」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「こ、これが…」

杏子に連れられて近くのビデオショップに入ってしばらく、私達は目的の物を見つけた。

魔法少女まどかマギカ

パッケージには私、杏子、まどか、さやか、ほむらの姿が描かれている。

杏子があんなに認めるのを渋っていたのはこう言うことだったのね…

不味い、非常に不味いわ。
もし私達がこのアニメの世界の住人とバレたら、モルモット直行便

に乗せられるのは確実だわ。

魂の物質化、第三魔法の成功例よ。これに食いつかない奴はいないわ。

それだけは回避しないと。

「マミ。とりあえずここから離れるぞ。視線がうっとおしくなってきた。」

周りに意識を巡らせると、確かに結構な数の視線が集中している。

「ええ…」

逃げるように店を出て、さっきの集合場所に戻る。

『ここで速報です。★◎地区で相次いで食い逃げ被害が出ました。被害にあったのは●●●商店街で、管理局員が通りかかった際、魔力の痕跡を発見したことで発覚しました。本人達に記憶がないことから幻覚魔法を…』

戻ろうとした。

「さ〜く〜ら〜さ〜ん〜？」

ダッシュで逃げる杏子を捕まえて路地裏へ。

気分はちょっと事務所まできてくれまへんか？よ。

「ち、違うんだマミ。これには深いわけがあってだな。」
「わかってるわ皆まで言わなくてもあなたは何か食べてないと死んでしまうものね。だからつい食欲に負けて万引きしたんでしょう？」
「うんそう…は！！」
「私刑。」

ティロ・フィナーレ！

「…えーと。ああ、今回もダメだったよ。キョーコは話を効かないからね。」

一話目（後書き）

ナガン「始めちゃった。本家は０も始めてないのに。」

マミ「私視点で物語が展開されるなんて…。もう何も怖くない。」

ナガン「ふーらーぐー」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9361z/

転生少女さやか(!?) ☆マギカ　スピンオフ　赤黄緑 inＳＴＳ

2011年12月29日18時48分発行